

徹底討論 南葵音楽文庫の これまでとこれから

南葵音楽文庫が和歌山に終の棲家を定めてほぼ10年。明らかにされつつあるその蔵書の魅力と日本近代音楽史に残された大きな足跡。これまでになし得てきたことは何か、そしてこれからの課題は何か。和歌山で育まれている南葵音楽文庫とともに過ごし、調査研究に携わってきた5名の研究員が率直に語り明かす21世紀の南葵音楽文庫と徳川頼貞。初めての座談会。

研究員大いに語る



photo: 佐本守



司会(林) 南葵音楽文庫は、1916(大正5)年春、徳川頼貞の父頼倫が経営していた南葵文庫の音楽部門として創設され、1932(昭和7)年秋まで活動していた旧南葵音楽図書館の蔵書を中心に形成されています。その活動期間16年の間に、この図書館は、当初の一般向けの音楽図書館(室)から、リサーチ・ライブラリーへと歩を進め、高度な蔵書方針のもとに音楽史古典から同時代音楽に至る文献、楽譜の蒐集を行うとともに、他方で南葵楽堂というコンサートホールを併設することによって、演奏活動を視座に入れた楽譜の蒐集にも力を注ぎました。南葵音楽図書館はこの二つの側面を併せ持った世界的に見ても余り類をみない私立の音楽図書館でした。日本最初の音楽専門図書館は

このような特質を備えていたことを私たちは記憶にとどめておく必要があります。

西洋音楽が導入されてやっと半世紀余りという時期に、徳川頼貞と関係者たちがミュージック・ライブラリーに懸けた志はまことに高いものであったと言わねばなりません。けれども、残念なことに、彼らのそうした足跡は、日本近代音楽史のなかで正しく語られてこなかったように思われます。私たち研究員の仕事は、そうしたなかで、個々の事例に即しつつ、総体として、「南葵音楽図書館」を正當に評価し直すことにもあります。

今回は座談会ということで南葵音楽文庫のこれまでとこれからについて心置きなくお話ししたいと思います。

出席者 美山良夫、佐々木勉、近藤秀樹、篠田大基（寄稿参加）、林淑姫（司会）

※

およそ10年にわたる研究調査を振り返って

美山 この10年を振り返ってしみじみ思っていることでとても大事なことがあります。それは多くの方々の助けを受けてきたということです。和歌山県立図書館スタッフ、サポーターの方々、講座に協力された専門家の方々とかいろんな方の顔が思い浮びます。何故このことを先に申しますかといえ、南葵音楽文庫が和歌山に来るに際し不安なことがありました。ひとつは確か来る四年程前に、徳川頼貞に関して『音楽の殿様』という本が刊行されました。著者に頼まれて南葵音楽文庫の資料を届けたのですが、参考文献には載っていますが、本の中では触れられていないのです。違和感を覚えました。もう一つは、事前に和歌山の何人かの方々とお話をしたことは、南葵音楽文庫についても徳川頼貞のこともよく知らないということでした。私たちは調査研究をゼロというかマイナスの状態から始めなければならない。上手くいくのだろうかという不安がありました。和歌山に来たのはいいけれど書庫に入ったまま誰にも顧みられず絶命するのではないかという不安です。そうしたなかでミニレクチャーを始めましたら、地元の方々が早速通ってくださり、サポーターの募集にも応募してくださった。図書館の方々の懸命の努力があり、また講座には多くの専門家が参加してくださった。そうした多くの方々の支援があって、今我々はここにいる。そういうことをしみじみ思います。



私自身について言えば、振り返れば随分知らなかった、知らないことが多すぎた。最初の頃に案内リーフレットを作りましたが、これには南葵音楽文庫の貴重な資料が紹介されていますが、それでは不十分だということが分かってきた。南葵音楽文庫は貴重な資料を持っているだけでなく、日本の近代音楽史のなかで大変重要な位置を占めていることが分かってきた。それは大変嬉しいことで、改めてリーフレットを作り直すことにしたいと思っています。南葵音楽文庫と徳川頼貞の理解につながってきたものに、「紀州徳川400年記念」として中央公論新社から刊行された三冊の書籍を挙げることができます。この三冊を読まずに南葵音楽文庫について語るのは許さないという書籍です。南葵音楽文庫は和歌山で生死の境をさまようのではないかとされた時期もありましたが今は違います。生きていくという実感があります。

佐々木 南葵音楽文庫の研究に携わってきて、今しみじみ思うことのひとつは出会いです。1967年に、戦中から戦後にかけて行方不明だった南葵音楽文庫の存在が明らかになり、東京と大阪で展覧会が開かれた



南葵音楽文庫 特別公開展（1967）

ことがあります。その時私は中学生で南葵音楽文庫についてまったく知りませんでした。展覧会の会場だった上野松坂屋のすぐ近くの中学校に通っていて、友達の読売新聞社勤務のお父さんからチケットを貰って見に行っただけです。古い楽譜が一杯あったことを覚えています。それが南葵音楽文庫との最初の出会いです。その後大学で音楽学を勉強してロンドンに留学したのですが、留学先のカレッジのミュージック・ライブラリーのライブラリアンの方にカミングス文庫を知っているかと訊かれ、全然知らないと言ったら、日本に帰ったらちゃんと研究するようにと言われました。そのことは頭の隅に残ってはいたけどすっかり忘れてました。それからまた何年も経って美山先生から南葵音楽文庫の調査研究を始めるといってお話があり、是非その末席に加えていただきたいとお願いをして、今日まで10年近くやってきました。私がこの間やってきたのはカミングス文庫です。まずは現時点での目録を作りたいと思ってずっと調べ続けてきました。音楽書、印刷楽譜の部に次いで、今回手書きの楽譜および音楽外資料の目録を紀要9号に掲載することが出来ました。完成することが出来てほっとしています。

近藤 しみじみっていうことで言うと平凡な言い方ですけど長かったなという思いと、でも短かったなという思い。いろいろなことが分かってきたという気持ちと分からないことがまだたくさんあるという気持ち、そしてもっと分かりたいという気持ちがあります。もっと調査の時間が欲しいということはしみじみ思っていることのひとつです。



篠田 和歌山での南葵音楽文庫の公開と調査研究の最大の意義は、約40年間箱詰めされていた資料が「棚に並んだこと」にあります。1977年駒場の日本近代文学館での公開終了後、資料は長らく段ボール等に保管され、必要な資料を探し出すことも困難な状況にありました。慶應義塾大学DMC機構で南葵音楽文庫の貴重資料のデジタル撮影を行っていたとき、作業は撮影しようとする資

料をいくつも並んだ箱のなかから探し出すことから始めなければならず苦労しました。けれど、和歌山県への寄託により資料が棚に並べられ、OPACへの登録や本格的な調査が可能となりました。その結果、1970年時点の目録にはない貴重な資料が相次いで発見されました。徳川頼貞と音楽家の親交を示すサイン入り楽譜や図書、南葵楽堂の活動を示す文書や原稿類、さらに板東俘虜収容所のドイツ人俘虜が使用した楽譜など、歴史的価値の高い資料が光を浴びることとなったのです。貴重資料コレクションとして知られてきた南葵音楽文庫には、それとは別の観点から重要な資料も、数多く含まれている。そのような認識が浸透してきたのが、和歌山で資料が箱から出されて整理された約10年の成果であっただろうと思います。

書庫で聴くさまざまな声

美山 南葵の蔵書は今閲覧室に2000冊程置かれていますが、それ以外は地下の貴重書庫にあります。書庫に入ると眺めていると歓迎してくれる人がいるような気がするんです。君よく来たねって。書庫には僕しかない筈なのに。「百年も待ったよ、こういう時期が来るのを」と言われているような気がする。その声の主は徳川頼貞。それから「これを見てください」という書物からの声もある。その書物を開くとそこにはサインがあり、そのサインはサン＝サーンスだったりヴァンサン・ダンディだったりする。今まで音楽史の本の中で知っていた人々がその本を介して自分とつながる気がする。そうかと思えば資料を使った人が見えてくる。日本人が演奏した《アルプス交響曲》がありますが、その前はニューヨークでこの楽譜が使われたことが分かる。パート譜に演奏者たちが名前を書き込んでいて、そのうちの誰かが楽譜の末尾に日付と演奏時間を書いていたりする。次々にいろんな人々が現れてくるんですね。たくさんの方がいて賑やかで、みんな和歌山に来て自分たちが関係した資料が見られるのを待っているのではないかと。それを思うとこの南葵音楽文庫が持っているポテンシャル、可能性、バラエティ、そういうものを一刻も早く伝えなくてはいけないという気持ちが出てきます。

佐々木 サインのお話と関連しますが、カミングス文庫の蔵書には、カミングスの蔵書票やサインばかりでなくて、いろんな人のサインや蔵書票を見ることができます。



南葵音楽文庫貴重書庫

そこから過去に遡ってその書物を誰が持っていたのか、どういう人が使ったのかをたどることができるものが幾つかあるんです。一番面白いのは、ヘンリー・パーセルが亡くなった直後に、奥さんのフランシスが出版した夫パーセルの歌曲集《オルフェウス・ブリタニクス》です。収録曲を少しずつ変えながら3回版を重ねていて、そのすべての版が南葵にあります。その初版が興味深い。1698年の初版を最初買った人物が分かるんです。チャールズ・バーニーが1789年に出版した著書の中で、その1冊について言及しているのですが、そのなかで示されているサインがカミングス文庫の《オルフェウス・ブリタニクス》のサインと一致するんです。そこから順に代々の所有者をたどり、後の所有者のカミングス、そして南葵音楽文庫に収蔵されるまでの来歴を明らかにすることができます。奇蹟的な感じがします。

南葵音楽文庫（南葵音楽図書館） の蔵書の特質と魅力

司会 南葵音楽図書館の蔵書は音楽史古典から同時代音楽に至るリサーチ・ライブラリーとしての蔵書、それに演奏のための資料群から成っていると考えられますが、まずはカミングス文庫を中心とした古典籍について、お話ししたいのですが。

佐々木 カミングス文庫の目録作業をする中でひとつはっきり分かったことは南葵音楽文庫はリサーチ・ライブラリーを目指したという点なんです。カミングス文庫はすべて一次資料です。二次資料っていわゆる参考文献ですが、そういうものではない。研究は一次資料から始まりますが、そうした資料が集中して集められているという点がカミングス文庫について思うところです。当時の日本で西洋音楽の一次資料を持つということはとても大きな意味を持っていた。西洋音楽の一次資料なんてないですからね、当時の日本には。戦後の音楽学研究者たちはヨーロッパに行って一次資料に触れることで研究を進めることになるのですが、1925年にカミングス文庫の楽譜について目録と解説を書かれた辻莊一先生は当時30歳、とてもお若い時に、初めて一次資料について研究をなさった。南葵音楽文庫は日本の音楽学研究の先鞭をつけたということが言えるのではないかと思います。

司会 その続きとして、1926年の田村寛貞による古典籍の蒐集が行われたのでしょうか。彼はドイツから、キルヒャーの『普遍音楽』、ツァルリーの音楽理論書など稀覯書をたくさん持ち帰っています。文庫には古典籍のほかに同時代音楽への関心を示す資料群がありますね。

近藤 資料全体を理解できていないわけではないんですけど、フランス音楽関係のものに関して言うと、たとえば1920年代の最先端の音楽について今の私たちから見ると、これはあるけど意外にもあの作品はない、というようなところはあります。ただ調べていくと、当時はまだヴァンサン・ダンディが現役で新作発表をしていた頃で、当時評価されていたけど今は忘れられている作曲家が活動している、というようなことが見えてくる。同時代音楽へのまなざしみたいなものは今の私たちと当時とは

違っているのは当然で、自分に見えていなかったものがある、そこが面白いという発見があります。時代をどう見るかということを考えていかなければ、そんなことを特にここ数年考えるようになりました。林先生、ロシア音楽関係のものはどうですか。

林 日本の西洋音楽受容史から見ると、国民音楽の形成という観点から一般的にロシア音楽へのシンパシーは強くあって、南葵でもチャイコフスキーをはじめ、リムスキー＝コルサコフたちのいわゆる「五人組」の作品は揃っているように思います。革命後の作品を見ると、グラズノフのような大家の作品はありますが、例えばショスタコーヴィチなどは見当たらない。その一方で「ソヴィエツカヤ・エストラダ」というソヴィエト国家建設のための歌を中心としたプロパガンダ音楽のシリーズは60数冊揃っているということがあります。南葵音楽図書館は、ソヴィエト音楽の基軸をそのようなものとして捉えていたのだろーかと思わせます。もっとも図書館の活動が1932年までに限定されているので、以降にも活動が続けられていたなら別の展開があったかもしれません。音楽史のフィールドワークをしているような気分になります。近藤先生、オーケストラの楽譜のお話をされていましたね。

近藤 そこんですよ。オーケストラの編成の大きな楽譜がフランス音楽に関してもあって、しかもスコアだけでなくパート譜が一揃いあったりするんですよ。スコアは既に購入済みなのにパート譜が欲しくてセットで買い直し、スコアが2冊あるということもあるんです。先程名前の出たヴァンサン・ダンディとか、フロラン・シュミットとかこんなものをひょっとして、中長期的に日本で演奏するつもりだったんだろーか。研究のためだけだったら要らないでしょう、フルト全揃いなんて。

司会 同時代の新しい音楽に敏感だったということは注目したいですね。シェーンベルクの初期作品《ペレアスとメリザンド》《室内交響曲》などもスコア&パート譜一式であります。どちらも日本初演は1960年以降になりますので使われることはなかったのですが。

篠田 先にも触れましたが、南葵音楽文庫はカミングス文庫等の貴重資料で知られますが、若き徳川頼貞が「音楽堂を建てたい」という夢を抱いていたことを忘れてはならないと思います。南葵音楽図書館の前身である南葵文庫音楽部時代に南葵楽堂とその地下の図書館がセットで誕生しました。ここは単なる貴重書の宝庫ばかりではなく、演奏を見据えた楽譜ライブラリーでもありました。収蔵された楽譜は楽堂の演奏会のみならず、外部にも積極的に貸し出されました。1924年の日本人による《第九》日本初演や、1942年の《ローエングリン》日本初演を

支えたのは頼貞の提供した楽譜です。頼貞は1917年頃、当時最先端だったシュトラウスの《アルプス交響曲》の演奏権付き楽譜をニューヨークで購入したことを著書『薈庭楽話』に記しています。購入時期については彼の記憶に曖昧な点がありますが、「いずれ日本の楽団がこの曲を演奏する日が来る」と確信し、将来を見据えて選書していた先見の明は疑いようがありません。

徳川頼貞の人物像への新たな視点

美山 徳川頼貞の人物像を知るためには著書『薈庭楽話』『頼貞随想』を始めとしてあちこちに書いたものや対談などをひたすら読むしかないのですが、それらを私の場合3通りの読み方で読みます。先ず書かれているものを読む。そこでは彼の感性がわかる。ソウルで聞いた《ソルベグの歌》とか、シベリアに沈む夕日とかですね、そういう感性的なことをとてもよく書いています。一方で、理性的な認識の方、日付や人名の正確性という点はダメな人で怪しくてしょうがない。基本的に彼の文章から直接読みとることは感性的な側面で事実関係は全て疑う。

2番目は行間を読む。彼の言い方は洗練されていて、華族的で、自分の意見を直接は言わない。他人が私にこんなことを言ったという風に書く。それは自身が言いたかったことの裏返しでもある。3番目は書かれていないことを読む。あることについてその場にいた筈なのに書かれていない。何故かと調べると書かない理由が分かる。この3通りの読み方をすると大体のことが見えてきます。彼の精神史みたいなもの、裕福な華族の家に生まれ、父の姿を見ながら育った彼が、経済的に傾いていき、戦後には滅びてしまう家を見つめながら、自身を作っていくという過程が見えてきます。音楽を通して公共事業を行う。社会に対する

奉仕者として自らを定める。その認識が戦後の参議院議員、国会図書館やユネスコにかかわっていくことになる。ですから、音楽図書館蔵書も趣味で集めた結果ではなくてあくまでも社会的存在としての図書館という認識に基づくものであったと考えられます。彼は単なる「音楽の殿様」ではないということです。資料を渉猟して読んでいますが、それに最近加わったものがあります。和歌山県立図書館に徳川頼貞が寄贈した書物のリストを館員の方が作られて、それを見ることができました。意外なことで嬉しく夢中で見ました。徳川頼貞の人物を語る何か秘められているのではないかと思います。

佐々木 南葵音楽図書館をリサーチ・ライブラリーとして考えるとき、徳川頼貞の音楽研究者としての側面を忘れてはならないように思います。彼自身は言わないのですが、南葵蔵書に、カミングスが会長を務めていたイギリスの音楽学会の機関誌があり、その会員名簿に海外の準会員として頼貞の名前があります。研究会に出席した





こともあったのではないかと思います。カミングスについてもコレクションの受け入れ以前によく知っていたと思われ、研究者としてのアンテナを感じさせます。

南葵音楽文庫の今後の利活用について

司会 最近、サポーターの方たちや普及会の方々のご努力で展示会や演奏会などが多く行われるようになりました。悦ばしいことですが、今後の南葵音楽文庫の周知、利活用の方向性についてお考えをきかせてください。

近藤 私としてはやはり県外からもいろんな人に利用しに来て欲しいという思いがあります。この資料を活用して和歌山以外でも発表してもらえればと思います。それがこの南葵音楽文庫を県外に向かって発信することにつながるということ、また外からの視点が今私たちが気がついていない意外な、ユニークな点をもたらししてくれる、それによって資料の利活用のいろいろな方向性も見えてくるかもしれないと思います。もう一つは、最初の話に戻りますが、私個人としてもっと時間をかけて研究したい、それにはもっと頻繁に和歌山に来たいという希望があります。

佐々木 最近海外からの問い合わせが増えてきて図書館の方々に対応していただいています。海外でも南葵の資料に基づく研究であるということをはっきり記した論文

が幾つも出始めました。今後そういうことが一層活発になるように願っています。カミングス目録も完成しましたので、できれば目録類をまとめて刊行したいと思うのですが。

美山 重い問題ですね。南葵音楽文庫関係の事業は県民の税金で賄われています。タックスペイヤーの方々にちゃんとお返しができていくかどうかというのも考えなければならぬ。最近「普及会」の活動もあって素晴らしいコンサートが開かれるようになってよかったと思いますが、本当のスタートはこれからだと思っています。和歌山の南葵音楽文庫は、契約書にある通り県民文化の向上に資するものでもあって、南葵音楽文庫が県民のライフスタイルの向上につながるものであるためには、時々講座とか音楽会があるというのではなくて、もっと別のファシリティが必要ではないか、図書館を超えた事業があってもいい。この事業のリストラクチャリングが必要な時期に来ているんじゃないか。ある意味で第一段階の事業というのはほぼ終わりにかけていて、次のステップのために我々が役立てるとしたらどのようなもので、必要なものは何かを考え、組み立てていく時期ではないかと今思っています。広く皆さんと相談しながら進めていきたいと思っています

(文責・林淑姫)

フロアより・アンケート回答集（順不同）

＜意見と感想＞

◎先日西コミセンでのコンサートで、今までの努力が形になったな、としみじみとした感慨を覚えました。向陽の学生さんたちの演奏、《祝南葵文庫開庫歌》の「めでためだ主の君」の歌詞には時をこえて伝えられるものがあり深く感動しました。

◎県立図書館に寄贈された徳川頼貞の図書構成を見ると公人としての彼の側面が出ているような気がしています。◎書庫での資料との対話をロマンチックに語られていて敬意をもたれているのに感動しました。県民への恩返しを皆で考えられるとよいですね。

◎文庫の利活用についてのお話に大変感銘を受けました。広く一般に活用されるためのファシリティについて考えていきたいと思います。

◎忘己利他の頼貞の精神はとても心に響きました。佐々木先生、中学生の頃から今につながる南葵のご縁、これからも研究よろしく願います。本日のお話を拝聴し、自分もこの立場でできる精一杯のことをし、南葵音楽文庫を広めていきたいと思っています。このようなアカデミーの回数が増えて欲しいです。

◎将来、和歌山が「音楽学、音楽文献学の極東のメッカ」となり、世界中の学者や愛好家、演奏者らが、頼貞氏が熱い思いであつめたこの貴重な楽譜、書物の「実物を間近に見、触れるための和歌山詣で」がポピュラーでわくわくする行動となることを期待します。

◎5年程前から定期的に南葵に通うようになり、いつしかサポーターとして「まちなかコンサート」のお手伝いをするようになり、さまざまな視点から学ばせて頂いています。美山先生がおっしゃる「書庫に行くといろんな人の声が聞こえる」は本当に身にしみるおことばで共感します。さて、延べ1500名の「まちなかコンサート」

のお客さまで今日新たに参加された方はどれくらいいらっしゃったのでしょうか。今後研究の仲間がもっともっと増えることを期待しています。それでも本当にこの1年間よくがんばりました。

◎書庫にひとりでいると「よく来てくれた、100年待っていたよ」という声がするというお話、研究員の方々のドキュメンタリーができないでしょうか。(あわよくば和歌山県の宣伝にならないか?)

◎南葵音楽文庫サポーターを名乗っていても何か「サポート」ができるわけでもなく、ただのファンで文庫の魅力にどっぷりつかただけの日々です。文庫の魅力を楽しそうに書いて話して下さる先生方に感謝申し上げます。私の文化向上、ライフスタイル向上は大きくはかられています。

＜質問と答え＞

◎アマチュアの音楽愛好家が南葵蔵書内の楽譜をコピーするなり、画像をとるなりして演奏会で上演することは可能ですか。権利問題などで難しいことがありますか。

【回答】可能です。但し、資料によっては複製が不可能な場合があります。また上演についても別途手続きが必要な場合があります。詳しくは図書館スタッフにお尋ねください。

◎南葵音楽文庫閲覧室への入室者数（国外、県外、県内）を知りたい。

【回答】昨年度の入室者数は196名でした。和歌山県立図書館websiteの「要覧/行事等実績/(16)南葵音楽文庫事業」(p.33)を参照してください。「要覧」は年度ごとに更新、公開されます。

<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/honkan/gaiyo/post-3.html>

※アンケートご回答誠にありがとうございました。皆さまの声を今後の参考とさせていただきます。(研究員一同)

南葵音楽文庫をめぐって[成果・活動・ひろがり] 2025年4月～2026年3月

*主催・発行・会場：特記なき場合は和歌山県立図書館

*氏名：特記なき場合は南葵音楽文庫研究員
*南葵音楽文庫サポーター、同普及会は、サポーター、普及会と略記

(編：美山良夫)

LECTURE

南葵音楽文庫アカデミー

「徹底討論：南葵音楽文庫」討論研究員全員(代読含む) 日程2/22 ※「わかやま新報」に関連コラム(3/3)

南葵徳川音楽塾

講師美山良夫(6/14)、近藤秀樹(7/19)、林淑姫(9/20)、佐々木勉(11/15)、柚木たまみ(滋賀短期大学教授、2/21)

重要資料報告会

報告者佐々木勉、近藤秀樹、美山良夫
日程2/22

学会発表

「南葵音楽文庫研究の現在 徳川頼貞の文化貢献に見る特性をふまえ」発表者美山良夫 日程2/28 主催三田芸術学会 会場慶應義塾大学(三田)

EXHIBITION

展示会「わたしたちの頼倫さん」

徳川頼倫100年没後100年展示会(6/15～7/22) 主催サポーター有志 ※「わかやま新報」に関連コラム(6/24)



徳川頼貞寄贈書目録完成・展示会

県立図書館への寄贈書約1200点の目録。展示会「徳川頼貞寄贈書の世界」(3/19～5/1) ※「わかやま新報」に関連コラム(3/31)

M E E T I N G

貴重資料の修復 コンディション・チェック

読売日本交響楽団による修復事業10年。緊急性の高い資料約30点を修復工房へ搬出(1/6)。修復担当者によるコンディション・チェック実施(2/21～2/23)

貴重書修復実務懇談会

講師飯島正行(修復担当者) 参加県立図書館、文書館スタッフ、研究員。南葵所蔵貴重書を例に解説・懇談・意見交換(2/23)



南葵音楽文庫サポーター歓談会

毎月第3日曜朝に開催。江本英雄(サポーター)による南葵徳川周辺話題発掘とペーパー配布・歓談。ゲスト講師招聘、情報交流、会食、見学会、など

PUBLISHING

『南葵音楽文庫紀要』第9号

寄稿美山良夫、篠田大基、林淑姫、佐々木勉
カミングス文庫目録 新版完結

100年を経ての目録新版。『南葵音楽文庫紀要』分載が第9号掲載分をもって完結。調査・研究・執筆佐々木勉

連載コラム「南葵徳川万華鏡」

「わかやま新報」に隔週掲載(第69～90回) 執筆美山良夫

論文掲載

「紀要は郷土愛のために——『南葵音楽文庫紀要』の使命」執筆美山良夫『現代の図書館』2025年3月号(9/18) 発行日本図書館協会

『南葵文華 Magazine』創刊

メールマガジン(発行・送信日4/1、5/18、6/12、7/15、8/14、8/18、10/5、11/11、12/30、1/26) 編集協力・執筆サポーター有志 発行(合)芸術資源研究所

定期刊行物寄稿

「南葵音楽文庫を明日へ——研究、普及、保護の現在」執筆美山良夫『絲綢之路』2026年新春号(1/26) 発行(公財)文化財保護・芸術研究助成財団

C O N C E R T

南葵音楽文庫まちなかコンサート創設

演奏澤和樹(Vn)、宮下直子(Pf)、瑞樹比美香(Sop)、解説まつだきくこ(サポーター)ほか 日程7/4、7/6奈良市、8/1和歌山市、8/16神戸市、8/17和歌山市、9/1みなべ町、9/1和歌山市、10/18岸和田市、11/3、11/15和歌山市、12/27京都市、2/7和歌山市 主催普及会

南葵音楽文庫100年コンサート

曲目サン＝サーンス《ミューズと詩人》ほか 日程10/3、10/4 演奏澤和樹(Vn)、宮下直子(Pf)ほか 解説佐々木勉 会場旧東京音楽学校奏楽堂 主催普及会ほか ※「わかやま新報」に関連コラム(10/21)、読売新聞に記事(東京版9/29)

『南葵文庫開庫歌』編曲完成、初演

編曲冷水乃米流(和歌山県文化奨励賞受賞) 初演11/3 演奏宮下直子(Pf)

徳川治鎮魂《涙の幣》和歌山初演

演奏カペラ・エレクトラ 指揮、解説吉田武司 日程11/3 作品は頼貞の弟で早逝した治のための追悼曲。ともに「南葵100年の集い」(主催普及会)で ※「わかやま新報」に関連コラム(11/11)

読響の和歌山公演

演奏読売日本交響楽団 指揮大友直人 会場和歌山県民文化会館 日程1/6 主催和歌山県、和歌山県文化振興財団 協力普及会(南葵音楽文庫パネル展示、資料配布等)

序曲《徳川頼貞》(吹奏楽版) 演奏

指揮今西秀彰 演奏向陽中・高校吹奏楽部 解説まつだきくこ(サポーター) 日程2/7 会場和歌山市西コミュニティセンター 主催普及会

南葵音楽文庫コンサートvol.4

曲目サン＝サーンス《ミューズと詩人》ほか 日程2/21 演奏澤和樹(Vn)、林裕(Vc)、宮下直子(Pf) 解説近藤秀樹

演奏会

「時を超える音楽遺産 南葵音楽文庫」出演瑞樹比美香(Sop)ほか 会場旧園田高弘邸(東京) 主催ムジークストラッセ

南葵文華第14号

令和8年3月31日発行

発行所

和歌山県立図書館
〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集

合同会社芸術資源研究所
〒600-8439 京都市下京区坂東屋町261-2-1001

編集協力

有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36